

真面目に一生懸命に働く病院をめざして

院長 福永 秀敏

中国の有名な故事に「人間万事塞翁が馬」というものがある。私の好きな故事の一つであるが、幸せだと思っていたものが不幸の原因になったり、禍の種だと思っていたのが幸運を呼び込むことがあるように、幸せや災いというのは予想ができないものだ、という意味である。

少子高齢化を背景に年々増大していく社会保障費、とりわけ医療費の増大を抑えるために診療報酬の実質的なマイナス改定が行われてきた。そのため急性期病院の多くはさまざまな経営努力を行っているにもかかわらず厳しい状況にさらされている。

そこでこの機会を前向きにとらえて、みんなで危機感を共有し、南風の伝統である「危機に際して一致団結できる」という得難い病院文化でこの難局を乗り越えたいと考えている。ただ「塞翁が馬」という言葉はあくまで困難をうまく切り抜けられた時に使える言葉だと思うので、近い将来にはみんなで一緒にこの言葉を使いたいと思っている。

さて病院の経営を考える時、支出の部分で最も大きな割合を占めているのはいうまでもなく人件費である。病院の長期的な発展を考える時、ジンザイの育成がもっとも重要といわれる所以である。

「ジンザイ」について考える時。縦軸にやる気（マインド）を、横軸にスキルを配置して、やる気がありスキルの高い人が「いい人財」とであると定義した（清水義昭）。とりわけ「やる気」が大切で、スキルはあってもやる気がなければ、ただの「人在」となる。スキルの方は経験を積めばある程度高められるが、やる気の方は経験のあるなしにかかわらず心がけ次第で、新入職者でも「人材」となれる。

日経新聞に、「性格力」重視で～真面目さ 雇用に影響」というタイトルで、鶴 光太郎慶大教授が面白い寄稿をされていた。ノーベル経済学賞の受賞者であるジェームズ・ヘックマンの研究によると、幼児教育のプログラムにおいて、ペーパーテストで測れる「認知能力」よりも、「非認知能力」＝個人的形質（性格スキル）を向上させることが、その後の人生に大きなプラスの影響を与えるのだそうである。人の「性格スキル」は、遺伝的なものでほとんど変わらないとされてきたが、むしろ人生の中で学ぶことができ、変化することがあるというのである。

そしてこの性格スキルは、「ビッグファイブ」と言われる真面目さ、開放性、外向性、協調性、精神的安定性であるが、とりわけ真面目さが一番重要だと位置づけられている。私たちの病院も真面目に一生懸命、地域に信頼される医療を目指して今後も頑張っていきたいと考えている。

これまで以上に関係各位のご厚意とご支援を心よりお願いしたい。

Nanpuh Hospital